

## 教育実習学内指導に関する一考察

### A Consideration regarding the in-school Guidance of Students' Teaching Practice

田 中 敬 一

**要約** 本学の学生が教育実習で直面する問題・課題は、近年多様化・複雑化しており、更には実習を放棄する学生数の増加が見られるようになった。学生の抱える問題に対し適切かつ効果的な教育実習事前指導を探るべく、直近4年間における幼稚園実習評価の実態を明らかにし、評価と学業成績の相関関係を分析した。実習評価の10領域とGPAの相関関係は、学年により異なるものの、全体としては弱いという結果が得られた。専門分野の学習の重要性については言うまでもないが、教育実習への橋渡しの役割をする実習学内指導、人間形成に影響を与える学科行事のような取組みの重要性を再認識しなければならない。

### I は じ め に

本学が幼稚園教諭・保育士を地域に輩出して40年以上の歳月が経つが、幼稚園・保育所が担う役割や、家庭の姿、社会から求められる保育士像など、保育を取り巻く環境は大きく変化してきた。同様に、学生自身についても、その時代を反映した学生気質、IT化に伴う価値観の多様化など多くの変化を見せてきた。本学では時代が求める、また現場が求める保育者を育成するため、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを学生・社会に明示し、また教育課程や実習指導の見直しを行ってきたが、

学生が実習で直面する問題は多様化しており、深刻さを増すばかりである。その結果、低評価を受ける学生や実習を放棄する学生が近年多く見られるようになった。保育実習、施設実習、教育実習に際しては、保育者、教育者として多岐に亘る資質が求められる。具体的には、保育の知識、短期大学生としての教養、音美体に関する感性、ピアノのスキルなどであり、これらの事柄を修得すべくカリキュラムが作成される。学生は保育の専門教科と教養科目の内容を十分学習し、各実習の事前指導を受ける。さらに実習での心構え、

社会常識など、講義では扱わない実践的事柄を、水曜日程と言われる学内実習指導で学び実習に臨む。また、学生は音楽体に関連する行事やゼミナールを通し、品性、良識、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を自然に身につくよう指導されている。しかし、近年の実習評価を概観すると、標準値3を下回る低評価を受ける学生が毎年一定数おり、更に最低評価をうける、即ち教育実習の単位取得ができない学生が1～3名見られるのである。

また、入学後に幼稚園教諭二種免許取得を自ら放棄する学生が数名おり、看過できない

数字となっている。このような事実から判断すると、今後教育実習学内指導の在り方を見直す必要性も考えられる。

本学での学習と実習評価の関係に関しては、2004年、松田広則、千葉弘明、鈴木郁生、時任真一郎、河合規仁が、保育実習・施設実習の評価とGPAの相関関係について先行研究を行っている<sup>1)</sup>。本稿では、直近4年間の教育実習を概観し、本学の学生の特徴・特性を明らかにし、まだ分析の行われていない幼稚園での実習評価とGPAの相関関係から実習指導の在り方を探る。

## II 教育実習の現状

### 1) 教育実習の単位取得状況について

本研究の調査対象の学生は、著者が本学幼児保育学科に赴任してから、実際に実習指導を行い、実習に参加し、実習園より評価を受けた平成21年度入学生81名、平成22年度入学生91名、平成23年度入学生91名、平成24年度入学生93名の合計356名である。

教育実習評価の現状に入る前に、実習の単位取得状況を見ることとする。本学に入学する学生のほとんどは、保育士資格、幼稚園教諭二種免許の取得を目指し入学する。当然ながら、水曜日に実施する「実習学内指導」には、毎年全員が履修登録を完了し出席することになる。近年国の施策により、保育所、幼稚園から子ども園への移行が進められているが、それに伴い保育園の求人票にも幼稚園教諭の資格が求められるケースが散見されるようになってきた。将来はこの2つの資格が現

場で求められる可能性が高くなっているのである。このような社会情勢を理解しつつも、教育実習を放棄し、保育士資格取得のみで卒業する学生もいる。また、前述のように、入学後すぐに保育士資格・幼稚園教諭二種免許取得を放棄する学生も後を絶たない。過去4年間の幼稚園教諭免許を取得しなかった学生の割合を見ると、平成21年度は全入学生の8%、平成22年度も8%、平成23年度生、平成24年度生はそれぞれ11%となっており、近年高い数字を示している<sup>2)</sup>。幼稚園教諭資格放棄者の中には、「保育実習Ⅰ」、「施設実習」「保育実習Ⅱ」を経験し、進路変更をする学生も僅かではあるがおり、保育自体に興味を失って卒業する学生もいる。(図1)なお、放棄者数には、実習に入る前に進路変更等による理由で退学をした数名の学生も含まれている。

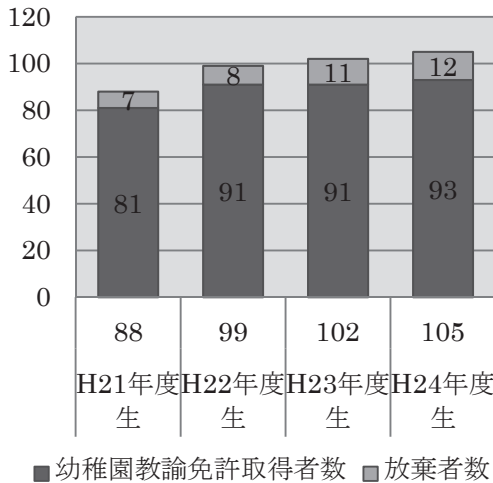


図1 幼稚園教諭免許取得者と放棄者数

## 2) 教育実習評価について

表1は本学の教育実習の評価をまとめたものである。3つの大項目、「基礎技術」、「研究的態度」、「実習態度」は、それぞれ4項目、2項目、4項目と細分化されている。

評価は5段階で、「5：非常に優れている、4：優れている、3：普通、2：努力を要する、1：非常に努力を要する」となっている。また、評価1が10項目中1項目でもある場合は実習の単位は取得不可となる。

表1の評価項目と評価の観点を実習園に送付し、全実習園が同じ物差しで学生を評価するように求めている。

次に、平成21年度生から直近4年間における実習評価と項目別平均値の推移を見ることとする。（図2、表2）

過去4年間のグラフの平均値を見ると、平成21年度生の平均値は3.56、平成22年度生は3.35、平成23年度生は3.59、平成24年度生は3.52となっている。平成22年度生の総合平均値が他より多少低くなっているものの、

グラフの波形が酷似していることが分かる。高い評価を受けた上位3項目は「協調性」、「言語態度・礼儀」、「幼児理解への姿勢」であり、低い評価を受けた2項目は「教育課程の理解・立案」と「集団指導・援助の技術」となっている。前述の5項目について、なぜこのような評価を受けたのか、本学における日常の指導から筆者の見解を述べてみたい。

一つ目の「協調性」が高い評価を受けているのは、前述の実習学内指導、学科指導において、協調性を要求される行事が多く組まれていることが、一つの大きな要因となっていると言えよう。例を挙げると、ゼミ単位で行われる、「砂浜彫刻」、「ゼミナール研究発表会」、無作為にチームを組む「模擬保育」、「ミニオペレッタ」など、学生がチームを組みゼロから形のあるものを創造していく過程において、多くの事を無意識に学んでいくようなプログラムになっている。更にはゼミ単位で行われる「スポーツ祭」、「光華祭」（学園祭）なども、協調性、コミュニケーション力、仲間意識を高める要因になっていると考えられる。

二つ目の「言語態度・礼儀」に関しても、前述の行事や、日々の生活を通して、幼児保育科の教育目標の一つである、「品性・品格を有する保育者を育てる指導」を念頭に置いて、受講態度、挨拶などを指導していることが影響していると考えられる。

三つ目の「幼児理解への姿勢」に関しては、入学してくる学生が保育者を目指し、保育に対する興味、そして何よりも子どもに対する関心、慈しみの心を持って実習に臨んでいることが、高い評価に繋がっていると言えよう。

低評価項目の一つ目、「教育課程の理解・

表 1 教育実習の評価項目と評価の観点<sup>3)</sup>

基礎技術	教育課程の理解・立案	園の教育理念や教育方針をふまえ、教育課程の編成を理解できたかどうか。また、自らの指導計画案の作成が、園の方針通りにできたかどうか。
	集団指導・援助の技術	設定保育・自由遊び等の場面において、全員を視座に入れて全体の関係を把握しながら、適切な関わりができたかどうか。
	個別指導・援助の技術	個別の関わりの場面において、個々の幼児の発達に即した対応ができたかどうか。
	環境の構成・整備	幼児が望ましい経験や活動を展開できるような教材・遊具・遊び等の構成に工夫が見られたかどうか。また、安全・衛生面への配慮、園具・遊具等の整理整頓、園内外の清掃等ができたかどうか。さらに、保育者として幼児への接し方、話し方、身嗜み等が適切だったかどうか。
研究的態度	幼児理解への姿勢	幼児への発達、取り巻く環境・遊び等の状況を考慮した上で、その状態像を理解しようとしたかどうか。また、その原因について、客観的かつ論理的に探究しようとする態度が見られたかどうか。
	技術習得への姿勢	指導者の指導・援助をよく観察し、それに対する幼児の反応等を自分自身のそれと比較考察し、自身の技術を向上させようとする態度が見られたかどうか。
実習態度	積極性	自ら進んで教育活動全般に関わろうとする態度が見られたかどうか。
	協調性	園の運営方針に従い、望ましい職場の人間関係を形成しようとしたかどうか。
	責務への自覚	保育者としての責務を自覚しつつ、与えられた業務を遂行できたかどうか。また、自己健康管理に留意し、無断欠席や遅刻もなく勤務状況が良好で、なすべき業務（引き継ぎ・伝達・報告等を含む）を確実に、かつ適切に遂行できたかどうか。
	言語態度・礼儀	園の職員への接し方、又は父母・来訪者との対応において、言語態度や礼儀等は適切であったかどうか。

立案」については、事前の実習園についての学習不足が考えられる。幼稚園教育要領などの一般的な幼稚園についての知識は授業で学習し実習に臨むものの、それぞれの実習園の教育目標、教育指針などについては、十分な理解をしないまま実習に入っている様子が、実習日誌の指導教員によるコメントなどから窺える。また、指導案の作成が苦手な学生がこの項目で大きく減点されている。文章を書く力、漢字の読み書きの力が欠落していると、指導案・実習日誌の作成にも大きな影響を及ぼすことは明らかである。「教育課程の理解・立案」の項目で最高評価 5 を受けた学生数は、

平成 21 年度で 2 名、平成 22 年度生で 7 名、平成 23 年度生で 4 名、平成 24 年度生で 4 名と、他の領域に比べ非常に少なく、学生の苦手とする分野である。今後は、学生がそれぞれの実習園の教育方針、教育目標などの事前学習を終えたことを学内指導で確認する必要がある。

二つ目の「集団指導・援助の技術」に関しては、「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」で子どもの前に立ち初めて保育を経験するものの、20 日間という短い時間では言うまでもなく集団指導に慣れるのには不十分で、この項目に関しては評価が低いのはある意味では当然のこ

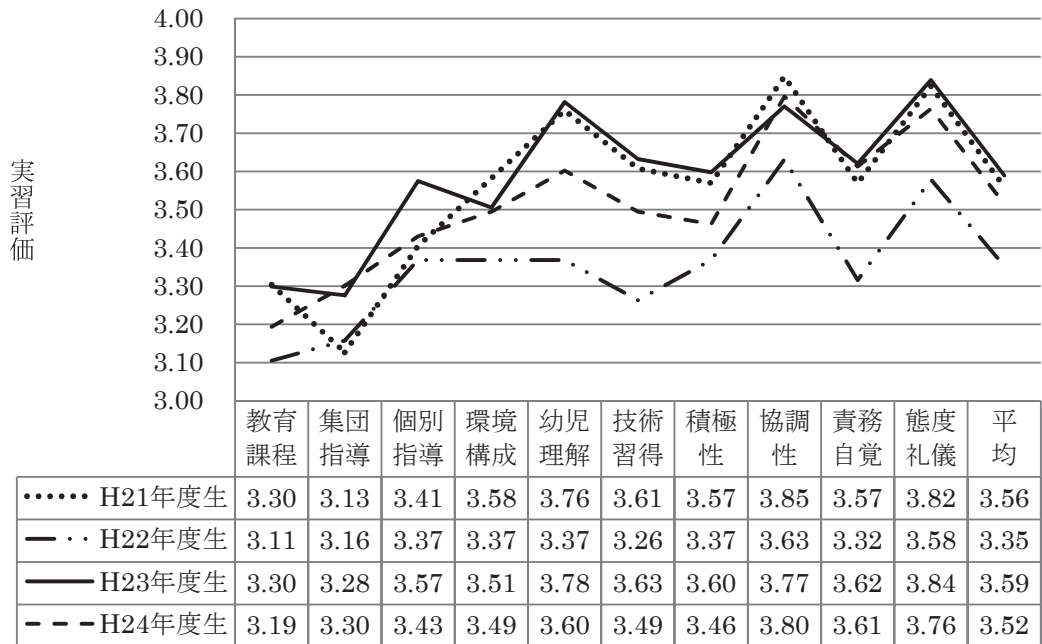


図2 教育実習評価10項目の年度別平均値（平成21年度生～平成24年度生）

表2 直近4年間の評価項目別平均値（平成21年度生～平成24年度生）

基礎技術（3.35）				研究的態度（3.57）		実習態度（3.63）				
教育 課程	集団 指導	個別 指導	環境 構成	幼児 理解	技術 習得	積極性	協調性	責務 自覚	態度 礼儀	平均
3.23	3.22	3.44	3.49	3.63	3.50	3.50	3.76	3.53	3.75	3.5

と而言えよう。「集団指導・援助の技術」で最高評価を受けた学生数は、平成21年度生で0名、平成22年度生で2名、平成23年度生で2名、平成24年度生で4名となっており、「教育課程の理解・立案」よりも更にその数は少ない。なお、この項目に関しては、学生が保育者・園児役を演ずる「模擬保育」などで改善に取り組んでいることを付け加えておく。

教育実習は、原則として、学生が卒園した幼稚園に学生自らが依頼し実習生として受け

入れてもらう。しかし諸事情から卒園した幼稚園ではない園で実習を行う学生も多数いるのも現実である。実習先の幼稚園が学生の卒業園かどうかということは、次の点で評価に微妙に影響を与える因子となっている可能性がある。評価をする側から見ると、学生の性格・習性など既に把握している点、評価を受ける側から見ると、園舎、教員に既に馴染みがあり、心の余裕があるという点である。また他の因子として、実習園の評価に関する考え方、実習生に対する指導方針等が異なる場



合も考えられる。全ての学生が全く同じ条件で評価を受けることが望ましいが、評価に影響を与える様々な要因が存在する現状は否定できないと筆者は考える。だが、これらの要

因が教育実習評価に直接、または間接的に影響を与えているかどうかという検証はまだ行われていない。

### III 幼児保育学科の GPA について

本学幼児保育学科が GPA 制度を導入してからすでに 10 年以上経過している。幼児保育学科では、GPA 値を実習に参加する上での基準として活用してきた。即ち、1 年次保育所実習Ⅰ、施設実習、2 年次保育所実習Ⅱ、教育実習に臨む際、直近の定期試験における GPA が 1.5 を下回る場合、実習に参加できないという内規を設けているのである。GP の最大値は日本の大学で一般的な 4.0、また不合格科目の GP は、0.0 としている。GPA 算出法についても、素点とレターグレイドを

組み合わせた一般的なものである。幼児保育学科で活用している GPA は、本試験の素点が 90 点～100 点（優）を A、80 点～89 点（優）を B、70 点～79 点（良）を C、60 点～69 点（可）を D、59 点以下（不可）を F とし、A を 4 点、B を 3 点、C を 2 点、D を 1 点、F を 0 点とし換算するもので、素点成績区間 90 点～100 点は、80 点～100 点と同じレターグレイドである優を使っている。GPA の算出は次の式で行う<sup>4)</sup>。

$$\text{GPA} = \frac{4 \text{ 点} \times \text{A の 単位数} + 3 \text{ 点} \times \text{B の 単位数} + 2 \text{ 点} \times \text{C の 単位数} + 1 \text{ 点} \times \text{D の 単位数}}{\text{総登録単位数 (F を含む)}}$$

幼児保育学科における GPA の活用に関しては、先に述べたように実習に臨む上での必要条件となっているが、他に学習特待生選抜の条件、卒業時には、GPA のポイントを各種の表彰のデータとして活用している。

学生の側から GPA を見ると、一部の学生、即ち、成績不振者と成績上位者にとっては、GPA はその機能を果たしていると言える。成績不振者にとっては、実習にでる基準値が目標になり、学習を勧奨するという意味において、成績優良者に対しては学習特待生へのインセンティブになっているという意味にお

いてである。両者にとってその意味合いは大きい、大部分の学生にとっては学業成績の一つの指標となっているものの、それ以上の役割を果たしているとは言い難いようだ。

また、GPA 値は全科目の結果から算出するため、「宗教学」、「日本国憲法」、「情報処理」、「英語Ⅰ」など保育の専門教科以外も含まれている。そのため、実習評価との関連性という意味合いからすると、検証が曖昧になることが懸念されるが、これらの科目もまた、保育者に求められる、広い教養と豊かな人間性を育むという点においては必要な科目であ

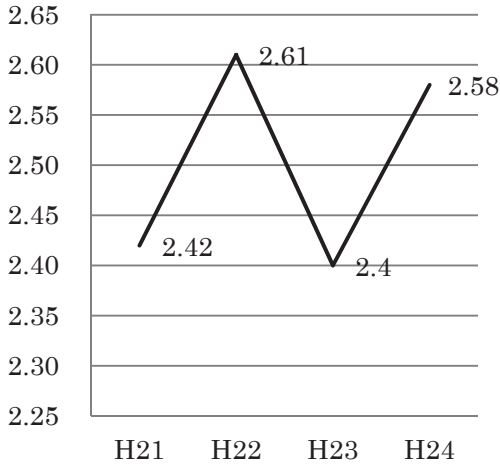


図3 GPAの平均値（H21年度生～H24年度生）

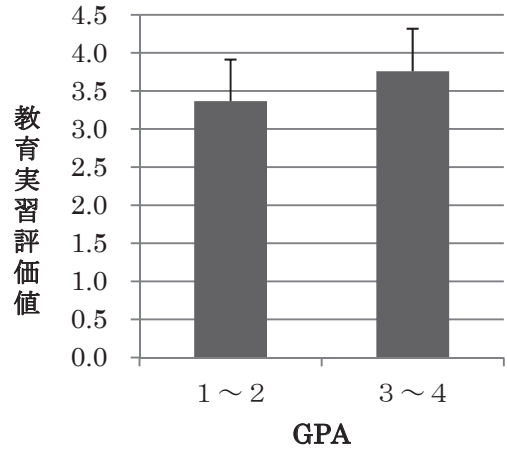


図4 GPA値2階層の評価平均値と標準偏差

り、ここではあえてGPAから除外せずに扱うこととする。

平成21年度生から平成24年度生までの全体のGPAの平均値を比較すると図3のようになる。平成21年度生の平均値は2.42、平

成23年度生の平均値は2.40と非常に近い結果となっている。平成22年度生と平成24年度生に関しても同様の事が言える。また、実習評価平均値が3.35と最も低い平成22年度生のGPAが2.61と最高になっていることにも注目したい。

#### IV 教育実習評価とGPAに関する考察

半田（2012）によれば、GPA値が高くなる学生の学修特性として、持続力、成長力、改善動機、達成動機などの心理・行動特性を持つ学生、具体的には見通し力、計画性、責任性、慎重さ、几帳面さ、手続きの確実な遂行性、こうした行動特性においてパフォーマンスの高い学生が結果的にGPAを高めていくことになると述べている。上述のGPA値が高くなる学生の学修特性を見ると、教育実習で学生が求められ要素を多く含んでいるが、本学の学生においてはどうかであろうか。

GPA値が3～4の成績上位の学生群と1～

2の成績下位の学生群の教育実習評価値のそれぞれの平均値（標準偏差）を $t$ 検定を用いて比較したところ、有意な差が見られた（ $t(178)=4.801$ ,  $p=0.000003$ ）。2群に有意さははっきり現れたにも拘わらず、成績上位群においては、GPAが最も高い学生Aの実習評価が3.8、最も低い学生Bの実習評価が4.9など、成績下位群では、GPA値1.22の学生が実習評価4.8を受けるなどの例が散見された。

このように、全体には有意差が見られたが、正の相関、負の相関に当てはまらない学生の

表3 教育実習評価10項目とGPAの相関係数

	教育 課程	集団 指導	個別 指導	環境 構成	幼児 理解	技術 習得	積極性	協調性	責務 自覚	態度 礼儀
H21 年	0.143	-0.040	0.136	-0.012	0.044	0.080	0.080	-0.034	0.065	0.019
H22 年	0.258	0.061	0.111	0.213	0.247	0.286	0.196	0.147	0.229	0.091
H23 年	0.344	0.344	0.206	0.354	0.200	0.310	0.249	0.220	0.408	0.041
H24 年	0.116	0.180	0.210	0.132	0.136	0.223	0.376	0.142	0.367	0.174

特性分析は別稿に譲りたい。

次に、表1の教育評価10項目とGPAの相関関係を検証すると表3のようになる。

平成21年度では、いずれの領域でもGPAとの相関関係は-0.04~0.143となっており、相関関係ほとんど見られなかった。またGPAと各領域の相関関係が見られたのは、平成22年度生では、5項目で弱い相関関係、23年度生では、5項目にある程度の相関関係、5項目に弱い相関、24年度生では、弱い相関関係、ある程度の相関関係がそれぞれ2項目に見られた。

平成21年度でGPAとの相関関係がほとんど見られなかったことと、平成23年度生に弱い、ある程度の相関関係が全ての項目に見られたことは興味深い。これらの理由に関しては、今後の研究課題としたい。

学年によりGPAと教育実習の相関関係は

相当異なり、前述の平成21年度生と平成23年度生のPGAの酷似に関しても、相関係数における類似は見られず、平成22年度生と平成24年生に関しても同様である。学業成績のみにより、実習評価を説明することは難しいように思われる。前述の松田広則、千葉弘明、鈴木郁生、時任真一郎、河合規仁（2004）の保育所実習・施設実習の先行研究によれば、「実習評価と成績の重回帰分析の結果は、相関係数0.629、 $R^2=0.395$ 、 $P<0.0001$ で、実習での評価項目によってGPA、つまり39.5%を説明出ることが分かった。」と述べ、ある程度の相関関係を説明しているが、拙稿では、研究年度、対象学生、実習施設が幼稚園と保育園・施設であること、評価項目、分析方法の違いなどにより多少異なる結果が出たものと思われる。

## V ま と め

保育を取り巻く環境が大きく変わりつつある今、保育者を毎年現場に送り出している本学においても、その指導方法に変革を求められている可能性がある。保育の現場や社会のニーズに応える保育者を育成すべく、学生の

指導方法においてもパラダイムチェンジを図る必要があるのではないかと筆者は考える。

今後の実習学内指導を考える際には、学生の苦手とする、「教育課程の理解・立案」「集



団指導・援助の技術」を念頭に置いた、きめ細やかな指導を心掛ける必要がある。また、学業は言うまでもないことだが、保育者の教育者としての一面を再認識させることも重要である。拙稿の結論としては、学業と教育実習の相関関係は余り見られなかったものの、学業の重要性は何ら変わるものではない。また、実習学内指導、学科指導・行事なども、人間性の向上という観点からすると、学業に対して勝るとも劣らない重要な指導形態であり、更なる指導上の工夫が必要と思われる。

文部科学省の教職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について

（第一次答申）」では、「いつの時代も教員に求められる資質能力」として、「教育者としての使命感」、「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」、「広く豊かな教養」などを挙げている。このような資質・能力を育む指導こそが、幼稚園教諭育成においても、必要不可欠であり、講義においてだけでなく、実習学内指導・学科指導・ゼミナールにおいて補完されることが望まれる。前述の資質能力の伸長を配慮した指導が、教育実習を真の意味で成功させる鍵となることを筆者は確信するものである。

## VI 謝 辞

本稿は幼児保育学科実習委員会で作成した教育実習評価のデータ、教務委員会で作成した GPA のデータを活用し書かれたものであ

る。幼児保育学科実習委員会・教育実習担当の皆様、教務委員会の皆様に厚く感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 松田広則、千葉弘明、鈴木郁生、時任真一郎、河合規仁（2004）「学内実習指導での成績活用を試み」－実習評価と学内成績との関係から－
- 2) 平成 21 年度生とは、平成 21 年度入学生の事である。以下平成 22 年度生、平成 23 年度生、平成 24 年度生においても同様の表記とする。
- 3) 八戸学院短期大学・幼児保育学科実習委員会実習資料より抜粋
- 4) 八戸学院短期大学・「学修の手引き」より抜粋

## 参 考 文 献

- 1) 半田智久（2012）「GPA 制度の研究－functional GPA に向けて」大学教育出版

- 2) 松田広則、千葉弘明、鈴木郁生、時任真一郎、河合規仁（2004）「学内実習指導での成績活用を試み」―実習評価と学内成績との関係から―（全国保育士養成協議会第43回研究大会 研究発表論文集）
- 3) 文部科学省・初等中等教育局教職員科 教職員養成審議会「新たなる時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」（平成9年7月28日）
- 4) 相馬和子・中田カヨ子（2009）「幼稚園・保育園 実習日誌の書き方」萌文出版
- 5) 八戸学院短期大学・学修の手引き
- 6) 八戸学院短期大学・実習委員会・教育実習評価
- 7) 八戸学院短期大学・自己点検・評価報告書